

## 奉安殿解体について



若佐小学校にこのような奉安殿がありました

### もう半世紀前の話

あの大戦が敗戦で終わった悲しみが、少しづつ遠のいた昭和二年の春、道庁の方から、佐呂間当時は村にも、占領軍の命令だと言つて、当時の、天皇の皇后両陛下の写真と、当時の教育の基本となる、明治天皇が国民に下賜された教育勅語というものを、保管する建物を、「奉安殿」と呼んでいた。

占領軍は、こんなもので日本の子供を小さいときから教育するから、あの恐ろしい侵略戦争をするのだから、取り壊せと日本政府に命令を下した。

奉安殿の建物は、そう大きくはないが、それぞれの学校によって、造った材料が一定でないが、石造・練瓦・コンクリートと。何しも固い材料ばかりを使つて。地域毎に、体裁も工夫して建てられていた。

当時、私が役場に勤めていたため、村長代理者小沢正男氏が（村長大橋与三氏追放中）、その奉安殿解体の任務をやつてくれと、私に指示と言うより頼んで来た。当時奉安殿のある学校は、上佐呂間・武士・中佐呂間・知来・仁倉・下佐呂間・幌岩・富武士と八つの数があった。

何んと言つても、石か練瓦かコンクリだから、タガネがなければならぬ。私は先づ佐呂間中の鍛冶屋さんの処を全部歩いた。何処の鍛冶屋も。タガネを作る鋼鉄がないと言つて引き受けてくれない。無理もないあの戦争で、各家庭の、鍋・やかん類まで供出させら

れたのだから。

もう一度タガネがなんとかならないかと、鍛冶屋回りをしたら、武田鍛冶屋さんが、にやにやうす笑いしながら「みんな断わられたね」といつて。他ならぬ進駐軍の命令、鋼鉄を何んとか手に入れて作つて上げませう。と言つてくれた。

武田鍛冶屋は、元から刃物造りの得意と世間も認めていた鍛冶屋。自分の得意の仕事の材料の、手の入る方法はあつたのだろう。

二丁のタガネを翌日作つて役場に届けてくれた。私はさあこれで、進駐軍の命令を佐呂間の方は何とか片づく、各部落長回りに、奉安殿解体の協力を頼んで歩き、タガネを使う順序も決めて、解体終つたら直ちに次の部落に申し送つてもらうようにして、村内の八つの学校に在つた奉安殿解体は、無事に、昭和二年の春のうちに終らせたとときは、責任を負わされていた私は、本当に、武田鍛冶屋さん外、解体に當つた部落の方々の奉仕に、感謝し今もあのときのことを考えると、感無量なものがある。

今も私は、一丁のタガネを記念のため保存しています。

文責 実盛 雅夫

## 役場職員が 漬物売りした苦勞話

敗戦後の、秋大根の豊作だった年、当時の物不足の頃だもんだから、余る分投げる等考えられず、役場職員が引き受けた大根を、大きなサイロを利用して、その頃の貴重な塩も大量に手に入れて、沢庵漬を作った。

それまでは仕事は順調よく出来たが、簡単に金になると思ったその沢庵が、当時純農村のような北見地方の、市町村の市街地も、大根があふれんばかり。だから市街地の人達も沢庵の売り込みに相手になつてくれない。

思い余った末、農協と役場の職員の中から選ばれた職員が、売り込みのため上京することになった。何の予備知識もないまま、漬物商を軒別に訪問、売り込みに努力したが、何しろ売り込みの素人、それに沢庵といつても糠が入つてなく、塩味だけのもの。都会の人の口には、塩が効き過ぎて味の点が問題であった。

農家の人達の苦勞を、漬物屋の主人に、いくら話しても聞いてくれない。そうこうしているとき、ふともらした主人の一言、漬物商の元締めさんを探ねて見てはと、この一言を頼りに早速出向き、事情を話して頼み込んだがてんで受け付けてくれない。

夜になって、帰る振りをして表に出たが、ここを引き下つても他に尋ねる当がない。夜

を徹して座り込みを覚悟で玄關脇で頑張った。

沢庵が出来た頃は晩秋が初冬。佐呂間からずっと南の東京でも夜は冷え込む。我慢我慢と頑張っていたら、夜明け前店の主人が気付つき、坐り込みの様子に驚き、まあ入りなさいと家の中に入れてくれた。

改めて、事情を話すと、聞き直してくれ、心よく全部引き受けてくれることになった。帰りに函館駅のホームを、意気揚々と歩く今栗山町の町長をしている佐藤進君の姿を今猶目に浮んで来る。

全国民生委員大会を、終らせて帰る高橋二郎先生と、自分等一行は、寿司詰め汽車の中で、新聞紙を敷いて座って、漬物売り込みの苦勞の果ての成功談を、高橋先生にしたのであった。

文責 実盛 雅夫

## 飛行機用燃料の アルコールの配給余話

昭和二十一年、敗戦の翌年、物資の極度に欠乏していた頃、特に酒類は手に入らなかつた。そんなとき、何の予告もなく、飛行機用アルコールが、ドラム缶二〇本、軍の放出物資として配給された。

当時村長大橋与三さん、助役は水澤正男さんであった。配給は統制されているので、指示通り正確を期しても地方の方に、疑心暗鬼

の目で見られるから大変な時代であった。

各地域の、自治会長さんの計いで、各家庭に配給され大変に喜ばれた。四倍に薄めてたら丁度飲みごろ。中に多少ガソリン臭いのもあったが、飲用には支障がない。当時の酒類の配給基準は、冠婚葬祭に限り二升、其の他は一升であったから、感謝感激と言う処であった。

開基百年目の年から丁度五〇年前になる年のこと。少し、役場の理事者のやりくりの中に、行政のために、そのアルコールを利用して、書いたことも一つの佐呂間のルーツとして、書いて見るが、

村長や助役が、支庁や道庁に出張の際に、手提げ鞆に入りやすく合せて、ブリキで缶造って貰い、それにアルコールを入れて一升持つて行く。四倍に薄めて。道庁や支庁の仕事の關係の役人さんに、佐呂間町の有利なことになることにそのアルコールがなつた話もある。

又村民に、酒など飲まない家に配給されたアルコールは、農家なら作業服や地下足袋にもなつた。市街地の非農家の人は、米や麦・味噌醤油になつた話もあった。

こんな話、古老の物語りを書けば、あの五十年前に敗戦した日本の様子が少しは、この記事の中にて知って頂ければと思ひまして、書きました。

文責 実盛 雅夫

## 救急車の運転中に 前の車ははずれた話

この話には、一寸前置き話をしなければなりません。今の佐呂間厚生病院が、町民の永年の大望であった医療施設の充実が、一九五二（昭和二十七年）二月に、佐呂間町国民健康保険病院として発足したとき、佐呂間には、救急車もなく、ハイヤー会社等もなく、それで、当時の紋別トラック佐呂間営業所所長であった私の所に、救急患者や、往診の医者を運ぶことの相談を持ち込まれた。

トラック会社が、医者や病人を運ぶ話でも、トラックに積むというわけに行かないので、私の判断で、「V8型フォード」という乗用車を、佐呂間営業所で買って、町民の要望に応じたのですが、トラックの運転手の人を用いるときは運転させるが、私もぜひ分利用はありました。

そのとき、国保病院の事務長に任命された来た実盛さんが、「佐呂間村の画期的な出来事だから、記念に写真を撮りましょう」と、私と田中さんと仙田さん、菊地天光堂V8型フォードの前に並び撮ったのです。シャッターを切った実盛さんは入りませんが。

前置き話が、ずい分永くなりました。この項目の本題に入ります。

本題は簡単な話です。

実は、現在の天光堂の前向いに、高橋二郎と言う歯医者さんがいました。この歯医者さんを、湧別の方に往診か、別の用だったかに乗せて行って帰り、丁度佐呂間の中に来たところで、突然に、そのV8型フォード乗用車の前の車の一つはずれて、前の方のころころ転って行ったが、乗用車本体はかたんと、片向いてしまったという話なんです。当時の優秀な外車だったのでしたが、高橋先生と二人びっくりしたが、笑うより仕方なかったのでした。カーブのところ、スピードを緩めていたことが幸いしたのでしょうか。じわじわとネジが緩んでいて、カーブでハンドルを切ったため、前車が横向いた途端の動きが、前車ははずれるということでした。

自動車に若いときから五〇数年、運転をし、又同業者との交際ある中に、運転中の自動車の車ははずれたなんて、先づこのときのほかありませんし、又他の人からも聞いてもいません。

（注、関東さんに、無理言ってこの記事を書いて頂きましたが、佐呂間に段々と、医療施設が整うと同時に、それに伴う機動力も必要になって来る段階として、お願いしたのでした。編集部）。

文責 関東 勝



国保病院に、一応救急車として入った車の記念写真V8型フォード

## 名曲「サロマ湖の歌」 ピラオロ台の伝説の由来

富士士のピラオロ台に今も一つの観光案内版がたっていて、「メノコ哀話」と題されたアイヌの伝説が記されている。

アイヌの伝説によれば、サロマ湖畔南方のピラオロ大地は、昔、トコタンアイヌがサロマ湖の魚族の見張り台としていた。

当時、十勝アイヌと北見アイヌの争いが起こり、インガルシ浜サロマ（五島公園）においても、日夜激戦が展開され、これが、ボラ合戦と名付けられ語り伝えられている。

この時、トコタンアイヌの若者サンクルも同族の危機に奮然として立ち上がり戦場におもむいた。

しかしながら、涙で見送ったサンクルの雄姿はふたたび帰ってこなかった。

ピリカメノコのマチカは毎日毎夜、遙かにインガルシを望み在り日のサンクルを忍んで涙の明け暮れを送っていたが、ついにピラオロ台より、湖に身を投げてしまった。

湖水の水は、マチカの涙でいまなお辛く、ピラオロ台上に吹く潮風にゆられて、あえかにも咲き誇る山百合の優しい姿が在りし日のマチカの姿としていまなお旅人の涙を誘っている。（原文まま）

戦後、復興の兆しも見えなくて、北海道観光が脚光を浴び始めたころ、佐呂間役場の職員であった、土田正、実盛、雅夫達は何とかサロマ湖の観光宣伝になる物はないかと、アイヌの伝説を創ることを思い立った。

浜佐呂間の五島公園の高台に、アイヌの語り伝えがあった。

それは、昔、斜里アイヌと北見アイヌの間にテリトリ争いが起こり、北見アイヌは、川口インガルシに籠もり攻防戦を繰り返した。やがて、武器が尽きて、川に遡上してきたボラの大群を捕まえて、それをつぶて代わりに投げ合つたと言う「ボラ戦争」のアイヌ伝説であった。

富士士のピラオロ台は、アイヌが魚群を発見する監視の高台だったと言われ、浜佐呂間の「ボラ戦争」の伝説をつかい、ピラオロ台のアイヌ伝説を創作した。

それが、案内版の物語なのである。

ピラオ台の風影



その頃の佐呂間は、戦後の樺太引上げ、復員、など、急激に人口も増加しだした時期で併せて、待望の湧網線が網走まで、前線開通するなどし木工場も隆盛期にあった。

そうした昭和二八年に今だに歌い次がれてる名曲「サロマ湖の歌」が、世に出たのである。

作詩家 中山正男は、浜佐呂間に生まれ、子供時代を佐呂間の市街地で過ごし、自伝的小説「馬喰う一代」は映画化されるなど、活躍していた。

ユースホステルの会長になった中山正男は、生れた佐呂間のピラオロ台にユースホステルを建て、サロマ湖観光の先鞭をつけた。

「君の名は」など北海道を舞台にしたドラマが一斉を風靡していた時代で、ピラオロ台の観光案内版の「メノコ哀話」は、格好の題材であったのだろう、中山はそれをもとに「サロマ湖の歌」を創ったのである。

作曲は「長崎の鐘」で知られる、古関裕而

## 役場構内の赤松の由来

昭和三三年、当時西区（西富）に住んで居られた深見文吉さんから、内地赤松の大木を寄贈するとの申し出があり、北見市の相馬庭師が活着大丈夫とのことで、運搬について、町内に（株）北見貨物が解散した後を引き受けていた紋別トラック、佐呂間営業所長の関

で歌は、伊藤久男という当時、ダイヤモンドコンビと言われたコンビによって発表されたのであった。

演歌とはひと味違う、「サロマ湖の歌」は声量と美声が要求され、一般向きとは言いがたかったが、NHKラジオ素人のど自慢大会で、歌自慢の人々に歌われ、広く全国にサロマの地名を知らしめたのである。

### サロマ湖の歌

中山 正男 作詩

古関 裕而 作曲

伊藤 久男 歌

一 ああサロマ湖の 水はからいよ

青く澄むとも

君知るや 君知るや

思い焦がれて 泣く女（ひと）の

熱い涙が しみてるからよ

二 ああ恋の鳥 月に嘆くよ

哀れ今宵も

さいはての さいはての

暗いコタンの 森越えて

遠く悲しく 君呼ぶ声よ

三 ああサロマ湖の 風は寒いよ

空に凍りて

音もなく 音もなく

白く静かに 降る雪は

君を慕いて 嘆くころよ

この歌が全国の巷にながれ、ロマンに満ちサロマ湖のイメージが伝えられた。

この「サロマ湖のうた」の佐呂間の地名宣伝に果たした役割は、小さくはなかったと思われる。それは、サロマ湖観光の夜明けともいえる出来事であった。

語り手 実盛 雅夫

文責 上伊沢 洋

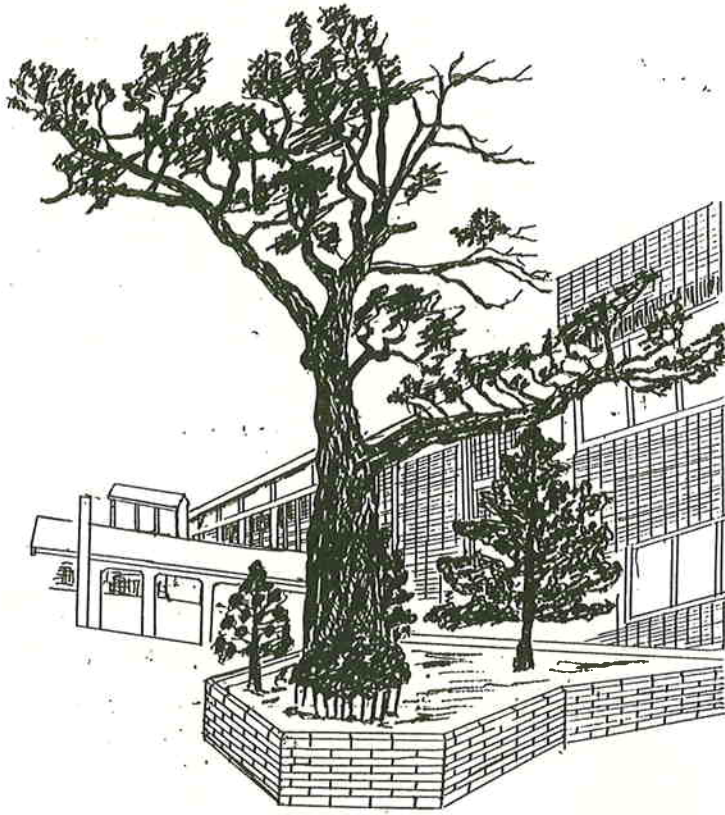
十ヶ所有るか判らぬままに、兎に角トラックを進めるその都度、電工の「八田」さんの好意で、切っては車を進め、通過すると直ちに繋ぐ、この作業を繰り返して前進。

当時、市街の西沢下駄店（現政岡精肉店）から天光堂、郵便局、役場という道筋には、数えきれぬ程の電線、八田さんの協力で、切っては繋ぎの一寸きざみで、役場へ着いたのは午後四時過ぎ、出発から計八時間かかり、

無事に相馬庭師に引き渡し完了。

今の大型トラック、トレーラの機能と比較して見ると、時代の流れの発展に驚くと共に、今尚健在にして、偉容を誇るこの松を見ると、「感」無量の想いで有ります。

役場も、昭和一六年、二月火災によっての焼失して、昭和一六年一二月再建された庁舎だった。当時の役場庁舎と共に有る写真か、絵があるときよかつたのだが、このイラストの



役場構内の赤松

バックの役場庁舎は、現在の庁舎を略図に描いたものです。

(この大きな立木が、内地赤松で、深見文吉さん寄贈、関東勝さんの輸送奉仕、電工の八田さんの通り道の電線処理奉仕。相馬庭師の腕前で確着)、記事重複しましたが以上が「役場構内の内地赤松の由来」でした。

語り手 関東 勝  
文責 実盛 雅夫

## 若里地域の「若里」の名の由来

佐呂間町内にある「若里」は、旧名を「床丹」と称していたが、若里と変った由来を書き残してみたいと思います。

床丹は、元湧別町に属していて、湧別役場、農協本部等の用達し等は、大変遠く、床丹地域の人は、開拓当初から、佐呂間が近いのに何故下湧別(その当時の湧別町の名)まで行かないと大事な用達しが出来ないのかと、本当に不便を感じていたという。

そうして、国鉄の西湧網線が、昭和一一年一〇月に開通したら、尚更に、床丹地域の人は、生活用品の買物や、病気をしたら佐呂間の医者に通う等、佐呂間と日毎年毎佐呂間と密接な、関係が深まって行くのに、行政と農村地帯の床丹の、農協に関しては、遠く下湧別まで足を運ばねばならなかった。

開拓の時代が終わるころ、床丹の有志の人は、佐呂間に編入を願ったのだが、あの第二次世界大戦のため、一時その願いの結果について中絶したままになってしまった。

そうして、敗戦後の落ち付きを、少し取り戻しかけた今、兼ねてから念願の、床丹地域の、佐呂間村に編入のため、神達要、横山勇、江田喜太郎、外有志の奔走によって、昭和二五年一〇月二一日道庁告示第九八二号により一一月一〇日よりの、境界変更が認可された。床丹地域が佐呂間に編入認可を、待ち兼ね

ていた床丹住民始め、佐呂間栄村長以下佐呂間村民は大変に喜んだ。

昭和二五年一月一〇日、この日を待ち兼ねたように、床丹の有志を始め、栄佐呂間村長、役場職員達が祝うため駆けつけ、大口丑定下湧村長を交えて、この日を迎えるまでの経過を顧み、将来についての、希望等話し合い心から祝う花が咲き、雰囲気盛り上ったころ、大口下湧別村長が立ち上り。

「皆さん、今生れ変った床丹の、新しい集落名について、私の考えを聞いて下さい」と半紙に、墨黒々と「若里」と書いたのを、両手で差し上げ、

「これからの床丹の、発展を願っての、私の案です」と、披露された。

一瞬会場は静まってしゅんとした。誰からともなく、会場は拍手が鳴り響き、全員この床丹が若里に新しい名に変ることに、賛同し感激したのであった。

(付記、小学校でも、床丹地域でも、地域名を、地域内に新しい名を募集中であったことを記しておきます)。

文責 実盛 雅夫

オホーツク



1987年5月3日北海道新聞に掲載された。国鉄湧網線有りし日頃の若里地域内の「床丹駅付近」スケッチをした方は北見市のオホーツク文化資料館伊藤公平氏。